

## 幻住庵記の異文の一つ

板 坂 元

幻住庵記には現在まで三つの異文が知られている。「芭蕉翁真蹟拾遺」に收められたもの、ついで富山県入善町米沢家

所藏の真蹟、そして「猿蓑」にかかげられていて成稿と見なされているものの三つである。奥の細道の旅を終えて上方に滞在していた、いわば芭蕉のもつとも円熟した境地にあつた時期に属するこの一文は、それだけに彼の心血をそそいだもので、現存する三種の異文はその推敲の過程を示しているものと云われている。しかし、それはもちろん三種にかぎられたものではない。米沢本の発見者であり幻住庵記にもつとも精通しておられる山崎喜好氏は草稿はもつと多いのではないかと推定されたし(参訳)「幻住庵記」草稿解説)、現に元祿三年七・八月頃書かれた去来宛芭蕉書簡の内容から見ても今日知られていない草稿が少くとも一つはあつたことは疑うべくもない(芭蕉講座)「書簡篇、一三二頁」。おそらく猿蓑所收の成稿ができ上るまでには芭蕉は何度となく書き直しを自らに

強いたことであろう。そしてその中の幾つかが今日依存しているというのが間違いないところであろうか。

ここに紹介しようとするのは、その推敲の過程に生まれた草稿の一つであろうと思われるものであるが、残念ながら年代の若い写本の中に見出されるもので、原物があるのなら是非姿を現してほしいものである。それは最近筆者の入手した「芭蕉文考」という小冊子中に引かれていて、筆者の知るかぎりでは既知の三種のいずれにも属さない本文である。左に全文を翻刻し二・三の問題をとりあげることにする。なお、この本文は従来の三種のうちでもつとも猿蓑所收のものに近いので、上段に「芭蕉文考」の本文を下段に猿蓑のそれを並べて出し、両者の共通個所に圈点をほどこすことにする。また、写本には原本にある添削のあとを朱または墨で示してあるが、組版の都合上で註として後にかかげる。

「芭蕉文考」所收「幻住庵記」

石山の奥いはまの後に山有國分山といふ昔國分寺の名を伝ふなるへしふもとにほそき流涼しくしけみ  
を分入坂の間三曲りのほる事一丁余半はに過て八幡  
宮たゝせ給ふ社いとかみさひたり其傍に住捨し草の  
戸のやねくさり壁落て松躑躅軒を囲みすゝき根笹庭  
を閉て狐狸の足跡のみほのかなり

名を幻住庵といふ是は勇士菅沼氏曲水の何かしの伯  
父の僧の世をいとひし跡とかやぬしは八とせはかり  
昔になりて栖は幻のちまたに残せり

さるを我為に漏をとめ垣根結添へなんとして四國に  
趣んとするをとめらる去年は松島きさかたに色  
をくろろし北海のあらいにきひすをやふりて今年  
湖水のほとりにたゝえふ鳩の浮巢のなかれとゝまる  
時節もあれはにや卯月の初いとかりそめにいりしや  
まの頓ていてしとさへおもひそみぬ  
まことに清陰翠微の佳境湖水北に堪て比えの山比良  
の高根より海の四面みな名高き処筆の力たらさ  
れはつくさす唯長松のもとに足を投出し青山に風を  
ひねつて坐す猶くまなきなかめにあかてうしるの峯

「猿蓑」所收「幻住庵記」

石山の奥岩間のうしるに山有國分山と云そのかみ國  
分寺の名を伝ふなるへし麓に細き流を渡りて翠微に  
登る事三曲二百歩にして八幡宮たゝせたまふ神体は  
弥陀の尊像とかや唯一の家には甚忌なる事を而部光  
を和け利益の慶を同しうしたまふも又貴し日比は人  
の詣さりければいと神さひ物しつかなる傍に住捨  
し草の戸有よもき根笹軒をかこみやねもり壁落て狐  
狸ふしとを得たり

幻住庵と云あるしの僧何かしは勇士菅沼氏曲水子の  
伯父になん侍りしを今は八年斗むかに成て正に幻  
住老人の名をのみ残せり

予又市中をさる事十年斗にして五十年やゝちかき身  
は蓑虫のみのを失い蝸牛家を離て奥羽象潟の暑き日  
に面をこかし高すなこあゆみくるしき北海の荒磯に  
きひすを破りて今歳湖水の波に漂鳩の浮巢の流とゝ  
まるへき芦の一本の陰たのもしく軒端茨あらため垣  
ね結添なとして卯月の初いとかりそめに入し山のや  
かて出しとさへおもひそみぬ

さすかに春の名残も遠からすつゝし咲残り山藤松に

に、這、登、り、松、を、伐、て、細、と、な、し、藤、か、つ、ら、を、も、て、か、ら、け、ま  
と、ひ、藁、の、円、座、を、敷、て、猿、の、腰、懸、と、名、付、眼、界、胸、次、驚、は、か  
り、岳、陽、樓、に、乾、坤、日、夜、を、ほ、こ、り、商、山、に、の、ほ、つ、て、魯、国、を  
あ、な、つ、る、若、狭、の、境、い、せ、の、山、美、濃、地、は、る、く、と、見、や、り  
て、伊、吹、か、嵩、天、を、さ、そ、ふ、近、く、は、膳、所、の、城、辛、崎、の、松、は、繪  
に、か、け、る、か、如、し、勢、田、の、橋、は、な、み、木、の、す、系、に、か、け、わ、た  
さ、れ、て、夕、照、を、待、笹、保、か、嶽、は、田、上、に、つ、く、ま、て、千、丈、か、峯  
袴、腰、な、と、い、ふ、山、有、雪、か、る、山、や、座、頭、の、は、か、ま、こ、し、と  
古、き、句、に、閑、待、り、し、を、常、は、お、か、し、く、も、な、か、り、け、る、に、も  
し、此、山、に、望、て、言、出、け、る、に、や、と、そ、三、上、山、は、士、峯、の、お、も  
か、け、に、か、よ、ひ、て、む、さ、し、野、の、旧、庵、も、お、も、ひ、出、さ、る、に、は  
あ、ら、す、日、に、涼、み、月、に、腰、懸、且、は、柴、拾、と、き、の、休、ら、ひ、と、も  
な、し、ぬ、谷、に、冷、水、あ、り、て、岩、の、間、よ、り、流、出、る、其、か、み、も、し  
此、水、に、ち、き、り、て、神、の、御、影、や、う、つ、し、初、け、ん、極、熱、の、日、照 註3  
に、も、た、ゆる、事、な、し、小、齒、朶、一、ツ、葉、の、み、と、り、を、伝、ふ、と、く  
く、の、拳、を、伝、て、一、炉、の、備、へ、い、と、か、ろ、し、す、へ、て、庵、の、た  
く、み、何、の、物、数、寄、も、な、く、仏、壇、一、間、を、と、り、て、も、の、こ、ぶ、処  
障、子、も、て、隔、た、る、の、み、な、り 註4  
こ、の、た、ひ、筑、紫、に、き、こ、ぶ、高、良、山、の、僧、正、洛、に、の、ほ、り、給、ふ  
を、あ、る、人、を、し、て、額、を、乞、い、と、す、み、や、か、に、筆、を、と、り、て、幻  
住、庵、の、三、字、を、送、ら、る、其、裏、に、我、か、名、を、書、て、後、住、人、の、記

懸、て、時、鳥、し、は、く、過、る、程、宿、か、し、鳥、の、便、さ、え、有、を、木、つ  
く、き、の、つ、く、と、も、い、と、は、し、な、と、そ、る、に、興、し、て、魂、吳  
楚、東、南、に、は、し、り、身、は、瀟、湘、洞、庭、に、立、つ、山、は、未、申、に、そ、は  
た、ち、人、家、よ、き、ほ、と、に、隔、り、南、薰、峯、よ、り、お、ろ、し、北、風、海、を  
浸、し、て、涼、し、日、枝、の、山、比、良、の、高、根、よ、り、辛、崎、の、松、は、霞、こ  
め、て、城、有、橋、有、釣、た、る、く、舟、有、笠、と、り、に、か、よ、ぶ、木、樵、の、声  
麓、の、小、田、に、早、苗、と、る、歌、螢、飛、か、ふ、夕、闇、の、空、に、水、鶏、の、扣  
音、美、景、物、と、し、て、た、ら、す、と、云、事、な、し、中、に、も、三、上、山、は、士  
峯、の、佛、に、か、よ、ひ、て、武、藏、野、く、古、き、柄、も、お、も、ひ、い、て、ら、れ  
田、上、山、に、古、人、を、か、そ、ふ、さ、ほ、か、嶽、千、丈、か、峯、袴、腰、と、い、ふ  
山、有、黒、津、の、里、は、い、と、く、ろ、う、茂、り、て、網、代、守、る、に、か、と、よ  
み、け、ん、萬、葉、集、の、姿、な、り、け、り、猶、眺、望、く、ま、な、か、ら、む、と、後  
の、峯、に、這、の、ほ、り、松、の、棚、作、藁、の、円、座、を、敷、て、猿、の、腰、掛、と  
名、付、彼、海、棠、に、巢、を、い、と、な、ひ、主、薄、峯、に、庵、を、結、へ、る、王、翁  
除、老、か、徒、に、は、あ、ら、す、唯、睡、辟、山、民、と、成、て、屣、額、に、足、を、な  
け、出、し、空、山、に、虱、を、捫、て、座、す、た、ま、く、心、ま、め、な、る、時、は  
谷、の、清、水、を、汲、て、自、ら、炊、て、と、く、く、の、拳、を、伝、て、一、炉、の  
備、へ、い、と、か、ろ、し、は、た、昔、住、け、ん、人、の、殊、に、心、高、く、住、な、し  
待、り、て、た、く、み、置、る、物、す、き、も、な、し、持、仏、一、間、を、隔、て、夜、の  
物、お、さ、む、へ、き、処、な、と、い、さ、く、か、し、つ、ら、へ、り  
さ、る、を、筑、紫、高、良、山、の、僧、上、は、加、茂、の、甲、斐、何、か、し、か、藤、子

念ともなれとなり山居といひ旅寝といひさせる器た  
くはふへくもあらずなん侍れは木曾の檜笠越の菅蓑  
はかり枕上の柱に掛たり昼は里の年寄神主なと来り  
て水汲茶を煮る程の力をくはふあるは稀く訪ふ人  
々も侍しに夜坐物静にして三声のあくひはゝかる事  
なく灯をかゝけては景を伴ひ阿阿に是非をこらす  
我しゐて閑寂を好としなけれと病身人に倦て世をい  
とひし人に似たりいかにそや法をも修せず俗をもつ  
とめす仁にもつかず義にもよらず唯若き時より横さ  
まにすける事ありて暫く生涯のはかりことゝさへな  
れは萬のことに心をいれず終に無能無才にして此一  
筋につなかる凡西行宗祇の風雅にをける雪舟の絵に  
置る利休か茶に置る賢愚ひとしからされとも其貫道  
するものは一ならむと背をおし腹をさすり顔しかむ  
るうちに覚えず初秋半に過に一生の終りもこれにお  
なしく夢のことくにして又く幻住なるへし

先、た、の、む、椎、の、木、も、あ、り、夏、木、立、  
頓て死ぬけしきも見えず蟬の声

元祿三夷則下

芭蕉桃青

にて此たひ浴にのほりいませかりけるをある人をし  
て額を乞いとやすくと筆を染て幻住庵の三字を送  
らる頓て草庵の記念となしぬすて山居といひ旅寝  
と云さる器たくはふへくもなし木曾の檜笠越の菅蓑  
斗枕の上の柱に懸たり昼は稀くとふらふ人々に心  
を動しあるは宮守の翁里のおのこ共来りていのし  
ゝの稲しひあらし鬼の豆畑にかよふなと我しらぬ農  
談日既に山の端にかゝれは夜坐静に月を待ては影を  
伴ひ灯を取ては阿阿に是非をこらすかくいへはとて  
ひたふるに閑寂を好み山野に跡をかくさむとはあ  
らずや病身人に倦て世をいとひし人に似たり情年  
月の移こし拙き身の科をおもふにある時は仕官懸命  
の地をうらやみ一たひは仏籬祖室の扉に入らむとせ  
しもたとりなき風雲に身をせめ花鳥に情を勞して  
暫く生涯のはかり事とさへなれは終に無能無才にし  
て此一筋につなかる楽天は五臓の神をやふり老杜は  
瘦たり賢愚文質のひとしからざるもいつれか幻の栖  
ならずやとおもひ捨てふしぬ

先、た、の、む、椎、の、木、も、有、夏、木、立、

1「翠微の佳境」の「佳」の右側に墨字で「処」の字を書いてある。

2「流出る」の「る」の左に見せ消ちの印がある。

3「もし」の二字の左側に見せ消ちの印がある。

4「なく」を見せ消ちとして「たくまず」と左側に朱書してある。

5「つかず」を見せ消ちとして「あらず」と左側に朱書してある。

以上が「芭蕉文考」におさめられている「幻住庵記」の全貌であるが、内容の問題に入るにさきだつて、「芭蕉文考」の書誌的な説明を簡単に行つておきたい。本書は縦二〇糎、横一二・五糎の袋綴の小冊子である。墨附は六十五丁、各丁表裏とも十一行にきちんとした書体で清書してある。題簽は中央にあるが書名を誌さず下方に二個の印がおしてあるのみで、内題には「芭蕉文考」となつてゐる。著者名はまつたく欠いてゐるが、題簽下方にある印が「杉」「鄰」と読まれ、見返しにある藏書印も「杉家藏書」と判読できるので、可能性のあるのは杉氏某なる人物である。本文中にも推定の手がかりとなるものはわずかに樗雲・梅人の名が頭註に見えるのみで、これとても著者とどれほどの関係にあつた人が判然しない。奥書の「享和辛酉歳八月」とある本書の成立の時期を示すものと思われる文字とあわせて、結局当時芭蕉の文を蒐

集し考証した杉氏某なるすぐれた研究家であつたということぐらゐしかわからない。なお、杉浦正一郎先生から筆蹟が酷似している点や、内容が当時の水準からして非常にすぐれてゐるので湖中ではないかとの御教示をいただいたが、湖中の使用した資料と本書に見出される資料の間にはかなりへだたりがあるので、湖中説にはなお検討の余地があるように思われる。

「芭蕉文考」という書名は独立した論考書を予想させるが、本書はもともと著者が編纂した芭蕉の文集について、収録した文の題目や成立年代の考証、真偽の判定と語句の註解を集めたもので、本来文集と一体となつて一部の書となるべきものである。著者の署名がないのは本書が従属的なものであつたからでもあろう。しかし、本文については著者はかならずどの本によつたという典拠を示してゐるので、その出典となつた書物が現存するかぎり本文篇の再現はさして困難ではない。(筆者の調べた範囲では本文の未知のものはない) であるが、注意すべきことは最近発見されて、既刊の芭蕉文集では日本古典全書「芭蕉文集」(朝日新聞社)にはじめて収録された「風光集序」がすでに本書の著者によつて文集に加へられてゐることである。そして、再現された本文と対照して本書の内容を検討してみると、著者の見識の高さや読みの深さは今日でも充分利用できるほどの成果をおさめてゐるようである。内容の詳細については別稿に譲るとして、本書の性格

は一応右のようなものである。

さて、本稿に掲げた幻住庵記は著者の判断にもとづいて、文集には採用されずに文考に参考として記載されたものである。著者は芭蕉の作乃至は作と伝えられるものを無條件に文集におさめようとしないうで、数種の本文がある場合には検討した上でその一つを採録するという方針で編纂にあたっている。そのために幻住庵記の場合は猿蓑所收のものをとり上げ、和漢文操のものと本稿の紹介した本文は文考に記録されたわけである。その個所のみ少し詳しく説明しておこう。著者はまず「和漢文操には賦とあり其文もちかふ（猿蓑の本文とちがうの意「板坂」）として幻住庵賦及び支考の註・論評を転写したのち、

考るに去來に伝ふる一通いまた得す予か知已難波にしはらく居住の折に野坡門葉播州の何某が持つたふ幻住庵記を写して予に贈らる

としてこの異文を紹介している。「去來に伝ふる一通」というのは、支考が「祖翁に幻住庵の文は三通ありて始の一通は落柿舎にあり」と和漢文操に記したのをさしている。すなわち池水大蟲編の「芭蕉翁真蹟拾遺」に收めたものではないかと今日推定されているもので、もちろん野坡門葉某の所持したものとは一致しないであろう。

著者はさらに本文の後に次のような評をつけている。

此書面所々消して脇書あるまゝに写したる也伝写の誤にてなくは

せをの再案とみゆる也文中に雪舟の絵におけるといふより貫遺する物は一ならんといへるは笈の小文にあるおもむき也もとより笈の小文乙州出版ながら金き物とは見へず此記も共に草稿ならん又文操の評に賦の花やかなるを捨て記の花実備れるをとるとあれは其意をくみてはせをの捨たる賦と此難波より得たる記とは予か選の文集にはいれず此支考に書かせて異同を知つて猿蓑のみに出る記をとるべきの便とす

異文の記載された事情は以上で明らかになつた。文考の著者は原物を實際に見たわけではないから、その点はじめから偽物でないとは断定してかかるのは早計にすぎるのであるが、この本文をめぐつて起るいくつかの問題は真偽についても解答を与えてくれると思うので、ここではただちに本文の検討にはいることにする。

まず、末尾近くにある「雪舟の絵における云々」の個所が編者も言及している通り、「笈の小文」の有名な一節と一致することである。これはこの本文に対する疑義を成立せしめる一つの根拠となる点であるが、著者の云つてゐるように「笈の小文」自体の検討と相俟つて考えられなければならないまい。『笈の小文』が乙州によつて開板された際、それは芭蕉によつてすでに十分な推敲が行われ成稿と考えられた遺稿であつたかどうか。もし芭蕉自身がまだ草稿と考えており、対外的に発表する意志もしくは発表したという意識をもつていなかつたならば、草稿の中から字句の一部を幻住庵記に移しか

えることはそれほど摩擦なくできたであろう。文考の著者の意見はあながち不当であるとは考えられない。そうでないとしても芭蕉が同じような字句を別なところで再度にわたつて用いるということは他の場合にも例がないわけではない。また、もし賢明な偽作者ならそれほど有名になつてゐる字句をことさらに持ち込んで疑の種をまくような無謀なこととはしなかつたであろう。かたがたこの文の芭蕉作なることは疑うに及ばないと考えられる。そして、逆に猿蓑所收の本文が末尾近く難解になつてゐるのを理解するには良い資料となるであろうし、「笈の小文」の成立に関しても有力な論拠となるのではあるまいか。

つぎに、四国に趣かんとするをとどめられたという部分もこれまでの幻住庵記に見られないものであるが、これは最近紹介された芭蕉の書簡によつてどういふ事実のあつたことが明らかになつてゐる。昨年、元祿三年卯月十日（すなわち幻住庵に生活していた頃である）の日付のある如行宛芭蕉書簡が南信一氏によつて紹介されたが（「国語」第三卷一号参照）、その中で

…持病下血なとたひく、秋旅四国西国もけしからすとおもひと  
ゝめ候、乍去、備前あたりよりかならずとまねくものも御座候へ  
は、与風風にまかせ候ま而難定候

という箇所は、幻住庵記の記するところとまつたく符合する。また、近々阿部喜三男氏によつて発表される書簡にも同様

なことが述べられてゐるのであるから、四国旅行への希望のあつたことも、それを幻住庵記に書き加える可能性も充分にあつたわけである。この点も芭蕉文考の幻住庵記が芭蕉作であることを裏書きするのではあるまいか。

もう一つ目立つのは、文の最後に「頓て死ぬ」の句がつけ加えられてゐることであろう。これも今までの三種の幻住庵記には見られなかつたところであつて、この草稿の出現によつて、句の制作時期も決定的なものとなり、「頓て死ぬけしきも見えず蟬の声」と「けしきも」の方が初案で猿蓑の「けしきは」が再案と考えられるようになる。また、「幻住庵記」の末尾にこの句を置いて見ると、文の方も句の方もよりよく理解鑑賞できるようになるかとも思う。

このように重要な異同をもつ幻住庵記が芭蕉作としてあつてよいこととなるなら、これと従来の三種はどんな関係にあるのであろうか。この三種の間に推敲の過程がたどれるのであるから、新たに現れた異文もこの系列の中に位置づけて見る必要もあろう。前述のように、この異文は猿蓑所收のものにもっとも近い構成を示している。米沢本や真蹟拾遺本が「五十年やや近き身は」にはじまつてゐるのに対して、「石山の奥いほまの後に」ではじまる両者がより近い関係にあることは一目で理解できるだろうし、鬮点をほどこした通り字句の共通するという面でも同様なことが云い得ると思う。それならば両者の間の先後関係はどうなるか。比較のために米

沢本と共通する個所がどちらに多いかを検して見たが、どちらかという芭蕉文考の方が米沢本と共通する字句が多いということは指摘できるけれども決定的なことを述べるほど確信をもつには至っていない。特に一方が草稿のまままで一方は成稿となつているために、両者の比較は簡単に結論を導き出すわけには行かないので、大方の示教を仰ぎたいと思つてゐる。ただ、前にあげた去来宛の書簡は右の比較について興味のある資料となるので以下やや詳しくふれておきたい。芭蕉は幻住庵記について去来やその兄震軒、凡兆などに意見を求めたが、現存する書簡の一通は芭蕉が去来からうけつた書簡（それは米沢本の本文に近いものであつたと思われるものに去来が論評を加えた書簡であつた）にもとづいて、あらためて推敲を加えた幻住庵記を再び去来に送つた際に書かれた書簡である。（「芭蕉講座・書簡篇」一一一頁。「註解芭蕉書簡集」一一二頁。）それによれば猿蓑所収の本文にきわめて近い草稿の字句がかなり多く知ることができ。詳細は荻野清・阿部喜三男両氏の研究にゆずるとして、本稿に關係のあることについてのみ考察を加えておく。まず、字句に關係する部分についていうと、例えば

△空山・屢顔心相違いかゞ可レ有ニ御座一候や。但シ胸中の空山たるべく候間、くるしかまるまじくや。このかみの御ぬしへ御尋可レ被レ下候。誹文御存知なきと被レ仰候へ共、実文にたがひ候半ハ無念之事に候間、御むづかしながら御加筆被レ下候へと御申可レ

被レ下候

とある個所について見ると、これは米沢本の本文にも猿蓑本にも存する字句であるが、これは本稿でとり上げた本文にはその部分はまつたく見出されない。同様なことが書簡中に問題とされている「除老・王翁」とか「我が聞しらぬ咄に日にくらす」「頓て立出てさりぬ」の字句についても指摘できる。これはいつたいどう理解したらよいのであろうか。

去来宛の書簡の他の部分から推して、幻住庵記の本文はこの書簡の書かれた前後に、「五十年や、近き身は」という書き出しのものから「石山の奥岩間のうしろに山有」という書き出しを持つてゐるものに、構成が面目を一新したことは明らかである。そして前述したように芭蕉文考所収の本文は「岩山の奥……」の書き出しを持つてゐて後者に属するものである。すなわち、去来宛書簡の書かれた前後にでき上つた本文でありながら、去来宛書簡に引用されたる字句をまつたく欠いている。これらを総合してつぎのように解釈したらいかであるだろうか。去来にあつて送つた本文を書き上げた前後に、芭蕉は問題となつた字句（それはとりもなおさず芭蕉に自信のない個所であつた）をことごとく省いて別な草稿を書き上げたものではあるまいか。しかし、結局去来たちの意見を容れた本文を成稿として発表し、他の草稿は草稿のまま、笈底に藏していたのであろう。それが何かの機会に野坡かまたはその門葉に伝わり、今日日の目を見ることになつた。想像をめぐ



らしてこのように私は考へている。去來宛の書簡は安永七年刊の「十戴薦」にすでに紹介されているのでこれを知つて居る後人が故意に問題箇所を削除した本文を作つたのではないかという疑も一応は起つてくるが、現在それを裏づける資料はなく、むしろ芭蕉の草稿であると考へられる資料の方が有力であるから、私はこの問題の場合にも偽作説をとらない。

また、現在芭蕉の文として通用しているもので出典という点では「芭蕉文考」と時代的にも信憑性の面でも同じ程度のものがかなり多いので、それらと同等の資格を持つものとしてこの資料をとりあつかうのは、あなたがち強引すぎるとは云い難い。

幻住庵記の書かれた頃の芭蕉の健康状態がすぐれていなかつた事は当時の書簡で明らかになつて居る。生來、人並以下の体力をしか持ち合せない上に、何といつても奥の細道の旅は彼の健康をいためつけずにはおかなかつた。そしてその疲れも癒えやらぬ庵住の間に持病の痔疾はしばしば彼を苦しめたのであつた。そういつた中で文字通り身をけずるような思いで再三再四庵住の体験と感興を形象化するために推敲してやまなかつた彼の姿は、いたいたしい修道者の境地でしかなかつた。幻住庵記の何か重苦しい印象はこういつた苦悩のしからしめるものであろうか。ここに一つの異文を紹介しよう。と筆をとりながら、私の胸中を去來したものは、紹介の喜びよりもむしろやりきれない暗い氣持であつた。何かさういつ

た事をめぐつて彼の文学を考へて見ようと思つていたが、今はこの氣持をもう少しあたたしておきたいと念ずるようになつてしまつて居る。ここに一つの事實を報告するのみで筆をおく次第である。

#### 附記

「芭蕉文考」は注釈その他種々な面で利用価値の高い文獻と思われるので、未刊連歌俳諧資料（俳文学会）の一つとして翻刻したいと思つて居る。詳細にわたつてはそれについて見ていただければ幸である。

なお本稿を發表するにあたつて杉浦正一郎・中村俊定両先生からいろいろと御指示をいただいた。附記して深謝する次第である。

（本学専任講師）